

## 〈資料紹介〉

# 狩野探幽筆「月次風俗図」模本について

武田恒夫

本稿で紹介する「月次風俗図」模本十二幅対は、今治市の菅井家より提供を受けた絵画資料である。軽妙簡潔な筆致で描き分けられた十二図には、歳旦より歳暮にいたる月々の年中行事ひいては習俗を一景ごと収めている。それらの中には今日既に廃れたケースもかなりふくまれ、それだけに近世の風習をうかがう上で興味ぶかいものがある。とりわけ、二月の念仏踊、六月の氷室の節供などは、江戸の行事色が濃いものの、全てがかならずしも江戸に限られたものともいい難い。八月の月見、九月の重陽の節供などには公家色を感じる。また、二月、四月の仏事関係、正月の万歳、十二月の節季候などを考え合せると、登場する階層は、公武僧俗にわたり、行事も特定の地域にしばらくは、い点も注意したい。これら珍しい風俗をふくめて、いかなる配慮のもとに十二ヶ月の歳時が組み合わされたのかは速断しがたく、おそらくは、施主による何らかの意向をくんだためではなからうか、そのように思われる。

各画幅の右上方或は左上方に、それぞれの月名、「十二枚之内探幽図」款記図<sup>1</sup>をほどこしているが、それぞれの題目については告げられていない。各幅の法量は、横巾が四〇・〇〜四〇・五糧とほぼ一定しながら、<sup>注1</sup>天地はまちまちとなっている。原図の画面形式が押絵貼六曲屏風一対であったにしろ、元々十二幅対であったにしろ、模写本の現状は天地不統一ながら、各図の構図は完結している。これは何を意味するのであろうか。模写の際の何らかの事情、例えば、余白部分を切りつめるといったことがらも考えられる。各幅共通して画中の書入れ

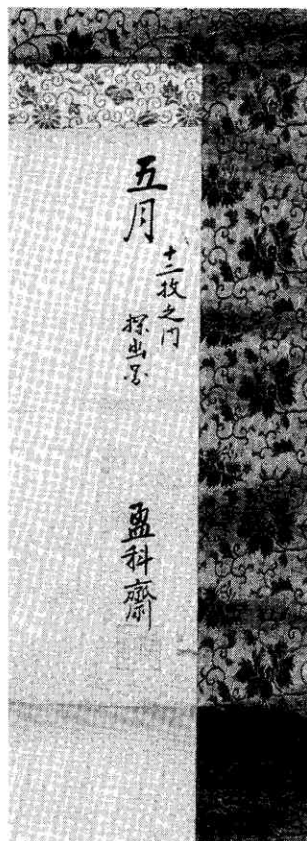


図1 尚武の節供図款記



図2 千秋万歳図

狩野探幽筆「月次風俗図」模本について



図5 夏安居図



図3 念仏踊図



図4 斗鶏図

箇所が一定していることから、表装時の作為でないことは明らかである。各画面は、淡墨仕立ての紙本淡彩で、朱、藍、黄をわずかながら使用するにすぎないが、減筆体による軽淡な筆使いとともに、巧みな彩色効果を挙げている。

以下、各国にみる年中行事や風俗の検討、模写ならびに原図筆者の問題、月次景物画の特質につき考察をすすめることにしたい。  
本文中※印のある作品は、末尾に図版掲載の所在を示し、挿図は割愛した。

一

正月「千秋万歳」<sup>せんすまんざい</sup> 図2 裏白と譲り葉を飾った軒下で二人の男が祝福芸を演じている。門付けで年頭の祝言をのべて、米銭を乞う。大紋を着て風折烏帽子をかぶり右手に扇子をかざすのが主役の太夫、これに向って頬かむりして鼓を打つのが才蔵である。上方では大和万歳、江戸では三河万歳が出廻った。

二月「念仏踊」<sup>ねんぶらひ</sup> 図3 菅笠に鳥の羽毛を挿し、赤布で覆面した男たちが太鼓や鉦鼓を打ちならし、身振りはげしく舞踏する。他の一人は長柄の杓をかついでいる。この踊りの正しい名称は不明である。二月の知られた年中行事は、初午、涅槃会、鶯合などを挙げうるが、これはその何れにも関係していない。江戸時代中期の作とみなされる堺市立博物館「月次風俗図」<sup>\*</sup>六曲屏風一双は、江戸風俗を対象とした市街図だが、その二月に当る場面にも、この種の踊りが人数を増して賑々しく描かれている。『日次紀事』<sup>二</sup>「二月」によると、「凡当月彼岸中、諸寺院有<sub>二</sub>法事<sub>一</sub>（中略）時宗寺僧作<sub>二</sub>踊躍念仏<sub>一</sub>、云々」とある。もとよりこれに該当するものではないが、参考までにふれておく。

三月「斗鶏」<sup>とりあわせ</sup> 図4 老若数名が軍鶏を斗わせている。待機する二人も一羽ずつ抱きかかえて、成りゆきを見まもるところである。鶏合は、三月三日清涼殿南庭で勝負を競う古代以来の伝統的行事であったが、中世より武家社会、さらに民間へも普及した。後世賭博の手段ともなったが、本図にそのような気配はみいだせない。

四月「夏安居」<sup>げあんご</sup> 図5 竹藪を背にした庵居に、法躰風の人物が読経に余念がない。空には時鳥が飛び、庵の垣根に筍が初夏の景物としてそえられている。『仏教語大辞典』<sup>注2</sup>によると、安居はインドの仏教徒が四月十五日から三ヶ月におよぶ雨期の間、洞穴や寺院に参籠したこ

とはじまるという。このため外出を避け、写経や坐禅、講經に専念した。日本でも、この風を受け夏安居或は雨安居と称し、宮廷から一般寺院、はては民間に及び、個々に安居を行う風習も生じた。

五月「尚武の節供」**口絵** 幟が五月の風になびく民家の軒先に、邪気払いの菖蒲が葺かれ、軒下には兜が飾られている。戸外では子供達の軍ごっこがたけなわである。五月五日の節供は江戸で特に賑いをみせた。『京都歳時記二』の「端午御祝儀」には、「武家は更なり、町家に至る迄七歳以下の男児ある家には、戸外に幟を立、青人形等飾る、云々」とある。

六月「氷室の節供」**図6** 富士山を背景に山麓の氷室に蓄えられた水を江戸に運ばせるところである。急がせている武士の様子を巧みに描く。『光台一覽』巻一に「六月朔日今に家たへせぬ氷室の御儀式」とあるように、古くは宮廷で水を賜る慣しがあつたが、後世武家の行事としても恒例化した。

七月「盂蘭盆会」**図7** 武士や若衆ら数名が扇を手にして踊りの輪をつくり、軒端には切子灯笼をつるす。図では歌を托して飾る七夕の竹葉も、初秋の風情として描きそえられている。七月十五日は、先祖の霊を迎えて供養する。『江戸絵本風俗往来』によると「路上に相集して盆踊りをなす。最初一人か二人酔に乘じ月下に歌ふや忽ち、三、五人出来りて踊始むるうち、(中略)末は三、四十人になり丸く囲ひて手を揃へ足を揃へて踊る。云々」とある。

八月「観月」**図8** 水のほとりで公家風の二人が仲秋の名月を見上げる傍に、秋草が咲き声はまだ穂をつけていない。八月十五夜には、清澄な秋気を通じ満月が煌々と輝く。登場人物は歌を詠むところであろう。

九月「重陽の節供」**図9** 三方さんぽうに載せた黄菊の花枝を前にして、公家と童が対座する。九月九日は陽数の九を重ねることから、重陽の節供と称し、菊花の宴を催し、菊酒を飲んで長寿を祈った。右下方に置かれた皿に実のついた栗の切枝を載せているのは、この日栗を贈遣することで、別名栗の節供といわれた風習をあらわしている。『日本年中行事辞典』<sup>注3</sup>によると、栗節供は近畿の風習といわれる。

十月「夷講」**図10** 岩上に坐する恵美須神像に向つて、供物を献ずるところである。神像は狩衣に風折烏帽子姿で右手に釣り竿、左手に鯛をかかえている。近世にはじまる夷講は、正月を十日恵美須、十月は二十日恵美須という。『俳諧歳時記』<sup>十月</sup>の「夷講」<sup>廿日</sup>によると、「此神商賈を護り給ふゆゑ也、この日蛭子の像に神饌神酒等供す、云々」とある。



図7 盂蘭盆会図



図6 水室の節供図

狩野探幽筆「月次風俗図」模本について

狩野探幽筆「月次風俗図」模本について



図9 重陽の節供図



図8 観月図



図10 夷講図



図12 節季候図



図11 お火焚図

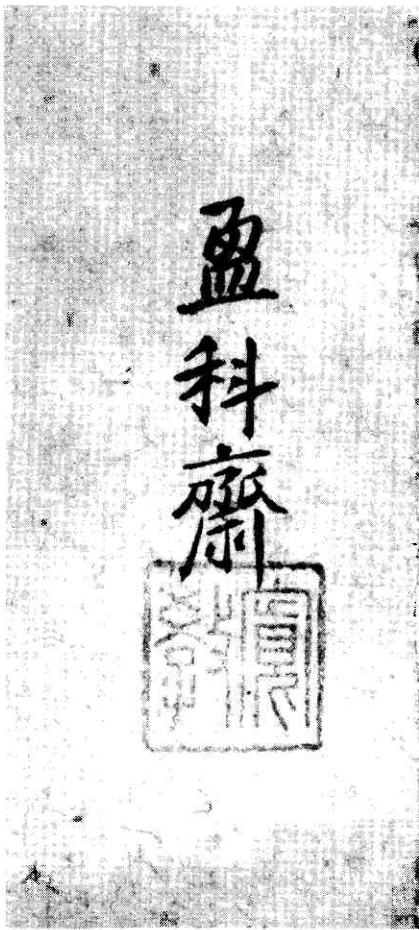


図13 落款



十一月「お火焚」**図11** 焚火を数人の男女がかこんで、神酒を供している。本来は火を扱う諸職人が庭火を焚いた行事であって、霜月祭ともいわれ、京都を中心として特に稲荷のお火焚が有名であった。松割木を井桁に積んで、中に依代の斎竹を立て、新穀や新酒、蜜柑などの供物を捧げ、神楽や祝詞を奏して火をつけるのである。江戸にも略化されて伝わった。

十二月「節季候」**図12** 笠に齒朶を挿し、赤布で覆面した異様な風体の男三人が踊るところである。『人倫訓蒙図彙<sup>七</sup>』によると、『都に十二月廿日より出る、節季にて候へば、くるとしの福と又年の終まで何事なくをくりかさねしをいはふ心なるべし』とある。「節季候」と唱えて戸毎に祝詞をうたい、踊りあるく門付けが、歳末出廻るようになる。

以上、月次諸行事の概略を述べるにとどめる。

## 二

本図の筆者については、幸い各画面の上方に、「十二枚之内探幽図 盈科齋」の款記**図13**をみいだす。これによって盈科齋なる画人が、狩野探幽（一六〇二―一七四）筆の十二枚からなる図を写したことが知られるのである。楷書による「盈科齋」なる署名には朱文方形「寛教」印がほどおこされている。一般の画人伝には見出しがたい齋号であるが、依田竹谷<sup>註4</sup>（一七九〇―一八四三）の号が盈科齋であることが解つた。今日余り知られることの少ない竹谷であるが、文化年間あたりの当時ではかなり著名な画人であって、江戸画壇の大御所であった谷文晁（一七六三―一八四〇）の弟子に当る。竹谷はいわば南画の人であったにもかかわらず、本図の如き月次風俗といった和画系の図様を写しとっているのは、和漢画の心得をもっていた文晁の影響によるものと考えられる。文晁は和漢両画系にとどまらず、南画さらには洋風画の分野にも作域をひろげた画人であった。竹谷も、『扶桑画人伝』などに伝えられるように、山水人物花鳥虫魚に長じたことされることから、多角的に題材をこなした画人と推測される。『武江年表』の「文化比」によると、当時の江戸画壇における各流派の代表画人が列挙されているが、それら周知の画人<sup>註5</sup>たちに交って、竹谷もその名を連ねていることがわかる。

渡辺華山（一七九三―一八四一）の『寓画堂日記』によると、文化十二年（一八一五）当時まだ二十三歳であった華山は、同年六月八日

の午後、文晁宅を訪れ、その足で竹谷を訪ねるが、会えなかった模様である。しかし同月二十一日には、逆に竹谷が華山を訪ね、粉本数葉を借りている。この年竹谷は二十八歳、両者交流の一端がくみとれる。同年の冬、文晁門下の歙形蕙齋（一七六四—一八二四）や渡辺華山らとならんで竹谷も加わった江戸南画人を相撲力士になぞらえた番付表が刊行された。実はこの番付は竹谷らがプロモーターとなって作製したものであった。ところが、この序列は公正を欠くものだとして、翌年の春になって、儒者の太田錦城（一七六五—一八二五）によって批判されるような事態も起っている。下って天保八年（一八三七年）に上梓された植田孟縉編集の『日光山志』五冊にも、文晁、椿椿山（一八〇一—一五四）、高久靄厓（一七九六—一八四三）らと共に、竹谷も加わって筆をとっている。いずれにしても、竹谷をめぐっての文晁門下の動静の一端をうかがうことができよう。

かかる竹谷が、探幽画の模写を行った背景に師であった文晁の古画への関心が大いに作用したことは否定できない。文晁の意欲は、既成のあらゆる画法に向けられていて、その和漢の領域にわたる古画研究は特筆すべきものがあつた。松平定信（一七五八—一八二九）の下令で、文晁らが寛政八年（一八二五）以来行った二千点近い書画をふくめた古器物類の模写事業もその一例であつて、調査結果を定信自身編集したのが『集古十種』八十五巻である。また、文晁自身による古画の縮図も「文晁縮図」として注目される。和画系の業績としては、文化二年（一八〇五）松平定信の指示によるとはいへ、「石山寺縁起」絵巻の第六・七巻を補作している。これは文晁の和画への自信のほどを示すものである。文晁はみずからの画法を披瀝するに際して、探幽にみる古画尊重の影響を強く認識していた。

唐絵教方も惣而探幽法印学古の向より取来、古土佐大和絵をも相用認、惣而探幽以来の教方にならひ、唐画の儀古画にならひ候て、法（こ）と其外語流古来より立候、云々

これは、文政四年（一八二二）老中水野出羽守忠成に差し出した書（註）に述べられた件りである。そこで文晁は「狩野如川周信門弟加藤文麗門弟谷文晁」と仰々しく狩野派の門流であることを明記しているのが興味をひく。おそらくこれと時期的に関連するのだが、片山賢の享和二年（一八〇二）の自序をとまなう随筆『寝ぬ夜のすさび』巻一にも、文政四、五年ごろ文晁が探幽以前の古画を愛好するようになったと、伝えている。このような次第で、師の志向するところが、竹谷による探幽画模写というかたちで受けとめられたと推測したい。しかも、従来知られざる探幽画の一領域を伝えることになった本図の意義については、次節で述べる。

原図の筆者探幽については、周知のごとく、江戸狩野の大成者としてのみならず、近世絵画のいわば基本的な指針を提示した巨匠として評価されている。正信以来の狩野派の伝統的な祖法を一変したということも、『本朝画史』をはじめとする近世諸画人伝の伝えるところである。漢画のみならず、和画の領域にも徹底したかたちで踏みこみ、狩野派のレパートリーを大きく広げることになった。硬質の水墨画のみならず、軟質の墨絵をも手がけ、減筆体による描き消しや余白にとむ草体描など軽妙自在な筆を駆使して淡雅・瀟洒な作風を創出した。

かねてより、探幽による物語絵、縁起絵、歌仙絵、肖像といった和様系の諸作品が注目されてきた。それと共に、古代以来の四季絵や月次絵、名所絵の系統を引く大徳寺「四季松図」<sup>\*</sup> 屏風や大倉文化財団の「鶉飼図」<sup>\*</sup> 屏風など、近世的な感性をもって制作された意義は、後世への影響を考えると、みのがせないものがある。これらは歳時を基調とする四季景物画や名所景物画の範疇に入る作例というべく、日本絵画史において、古代以来四季絵や名所絵を継承する和様系鉅脈の確認にはかならない。探幽が近世的な視覚によって掘り起した貴重な成果といえるであろう。

竹谷による探幽筆「月次風俗図」模写本を特に注目した理由は、探幽が月次景物画も手がけていたことが、この模写本によって証左されるためである。これと関連して、さらに興味をひくのは、谷文晁の「古図縮臨」<sup>注8</sup>のなかに、久隅守景筆のやはり縦構図の「月次風俗図」十二図が縮写され、しかもその絵様が、本図とほぼ一致していることであった。守景は、著名な「納涼図」や「宇治茶摘・賀茂競馬図」、一連の「大和耕作図」などの屏風絵を通じて、探幽による景物画のよき継承者であったことが指摘できる。探幽と守景とがほぼ同工の月次風俗図を制作していたことは、間接的な絵画資料ながら注目にあたいるものといえるだろう。掛幅形式にしろ屏風押絵貼形式にしろ、月次景物画を江戸時代において、各流派の画人たちがそれぞれの流儀で手がけていたことは、いくつかの遺品によって既に明らかである。それらは、主として花卉花鳥図系と年中行事図系とに大別できる。以下、各派による月次景物画の代表例を参考までにふれてみる。

花鳥図系の最も古い主題は、定家詠十二月花鳥歌絵<sup>注10</sup>であって、周知のように、藤原定家の『明月記』に述べられて以来、長い経過をた

どって描きつがれてきたものと思われる。しかし、近世初期まで現在のところこの種の遺品はみいだされていない。ところが、狩野探幽に至って、その筆と伝えられる作例が<sup>注11</sup>三点も存在し、探幽がこの主題と深くかかわっていたことが推測される。その後の遺品として、土佐光起（一六一七―一九一）筆の東京国立博物館の二巻本、尾形光琳（一六五八―一七一六）による静嘉堂の六曲屏風一雙押絵貼、円山応挙（一七三三―一九五）<sup>注12</sup>原画六曲屏風一雙押絵貼縮模本などをはじめ多数の類品がみいだされている。土佐派はともあれ、光琳や応挙といった諸派の画人が、探幽の先例をそれぞれのかたちで継承している点が<sup>注13</sup>注目される。

右と関連して、定家詠月次花鳥歌絵とは別系列の月次花鳥図も近世に盛行した。光琳の筆になる例として、「<sup>注14</sup>十二月月花意図」六曲屏風一雙押絵貼を挙げることができ、また洒井抱一（一七六一―一八二八）の筆になる御物本をふくむ十二幅対や六曲屏風一雙押絵貼本が知られている。各幅や各扇に月々のふさわしい花鳥を振り当て、変化にとむ題材の組み合わせと多様さがねらわれている。四条派の場合、岩国の吉川家には、塩川文麟（一八〇八―七七）の十二月月名所・花鳥図<sup>注14</sup>十一幅（正月欠損）が、偶数月を京名所、奇数月を花鳥に割り当てるといふ珍しい趣向を示す。しかも、諸名所にも月々の季節の景物をそえているのが注目される。また、文人画系の池大雅（一七二三―一七六）も、この種の画題には関心をよせていた。「<sup>注15</sup>年中行事図」六曲屏風一雙は、一扇毎に図様を完結させ、各月それぞれにふさわしい花鳥或は年中行事を選んでいふ。したがって、年中行事という題名が不適切であったことがわかる。

ところで、年中行事は人事系の歳時であって、花鳥の如き自然系とは異なる。竹谷が模写した探幽筆の原画も人事系であった。この種十二月風俗図は、掛幅形式よりもむしろ屏風押絵貼形式の一扇毎に各月の人事を配当する方式が盛行している。各扇に月々の行事を一場面ずつ完結させ、定家詠月次花鳥歌絵と同様の図様構成を示す。風俗画系の作例として、大坂を舞台とした「難波月次風俗図」六曲屏風一雙が挙げられる。大阪市立博物館蔵品で、筆者は月岡雪鼎（一七一〇―一八六）、年記により安永元年（一七七二）の作とわかる。京都のみならず、この時期大坂にも独自の年中行事が成立していたことを、細やかな筆致で謳歌する。当然、江戸にも時世の風潮は、浮世絵師を通じてこの種の類品を生むことになる。ロスアンゼルス・カウンティ美術館の「<sup>注16</sup>月次風俗図」六曲小屏風一隻は、正月から六月までの他隻を失って七月から十二月までの江戸美人を主役とする歳時を描く。肉筆浮世絵で、筆者は北齋の門人蹄齋北馬（一七七一―一八四四）と伝えられている。さらに一例を付け加えるならば、幕末の復古大和絵運動の先駆者である田中訥言（一七六七―一八二三）の「<sup>注17</sup>十二月図」六曲屏

風一双を挙げたい。一扇ごとに、有職故実にとどまらず各階層の年中行事を適宜配当し、各画面を余白によって図様の連結をはかっている。淡彩による簡潔な墨絵であることや、人事系の月次風俗をもって一貫されている点は、探幽原画の「月次風俗図」と共通する。

右の如く、近世の各流派にわたる例をわずかながら取挙げたにすぎないが、月次風俗図は近世絵画の一ジャンルとして、幅広い展開をみせている。本図は時期的にもこの種一図一場面の月次風俗図の先駆例であるばかりでなく、先にもふれた洒脱な画趣で軽妙に人事描写を試みている点、後の月次風俗図とは一線を画する特色を示す。十二ヶ月にわたる歳時を編成した一連の花鳥図や名所図、風俗図が、近世の諸流派によって制作された原点に、本図にうかがえるような探幽の新志向を想定することは、あながち不当な試みではないように思われる。

以上、模写本ながら新出の「月次風俗図」十二幅対は、依田竹谷という画人の一端を照明すると共に、狩野探幽による今は失われた月次風俗画の存在を確認させる新資料として、紹介する次第である。

最後に、本資料二月の歳時が念仏踊であることについて、京都市歴史資料館の山路興造氏より教示をえた。また、本資料の撮影等に協力を惜しまれなかった菅井郁子女史にも感謝の意を表したい。

#### 注

- 1 各幅画面の縦法量は、左の如くである。

正月	八十一・八糎	二月	六十四・七糎	三月	五十四・〇糎	四月	八十一・二糎
五月	九十五・五糎	六月	九十五・三糎	七月	九十五・三糎	八月	九十一・一糎
九月	五十四・三糎	十月	八十一・八糎	十一月	八十一・八糎	十二月	五十二・〇糎
- 2 中村元著『仏教語大辞典』（東京書籍刊行、昭和六十年）
- 3 鈴木棠三著『日本年中行事辞典』（角川書店刊、昭和五十八年）
- 4 『古画備考』の「近世」によると、江戸下谷二丁目袋丁に住し、名は瑾、字は叔年、号は凌寒道人とされる。その他、『扶桑画人伝』には、通称は基三郎、字は子長、三谷庵と称されていた。本図の印影により「寛教」なる画号をもっていたことも知られる。なお『古画備考』に、竹谷の紙本著色横小幅画に梅辻春溪の賛をもつ「蓮図」のことが注記されている。
- 5 『武江年表』の文化年間に活躍中の各派画人の名は、左の通り。

狩野伊川院（一七七五―一八二八）、晴川（一七九六―一八四六）、酒井抱一（一七六一―一八二八）、谷文晁、谷文一（一七八七―一八一八）、英

- 一珪(一七四八—一八四三)、長谷川雪旦(一七七八—一八四三)、鈴木南嶺(一七七五—一八四四)、大岡雪峰(一七六五—一八四八)、春木南湖(一七六〇—一八三九)
- 6 森銑三「谷文晁の研究」(『森銑三著作集』第三卷所収) 参照。
- 7 野村文紹『写山楼之記』所収。
- 8 吉川靈華氏旧蔵、京都国立博物館現蔵、文晁による種々の縮図をおさめた冊子。この箇所の冒頭に「守景之筆十二月(月次)屏風」と記され、卷子本でなかった点でも共通している。文晁「縮臨」については、狩野博幸氏の紹介が『日本美術工芸』五〇九号にあり、参照されたい。
- 9 拙著『日本絵画と歳時』第三章「月次の景物」(『へりかん社刊、平成二年』)参照。
- 10 武野恵「近世における定家詠月次花鳥歌絵の展開—吉村考敬作品を中心に—」(『MUSEUM』四一四号、昭和六十年九月)
- 11 出光美術館本 図帖一冊 藤田美術館本 十二幅対 ミシガン大学図書館本 六曲屏風一雙押絵貼
- 12 武野前掲論文によると、応挙が恭礼門院のために描いた「御屏風定家卿十二月花鳥和歌ノ意精采」を藤田文英が「小下画」として転写縮模したものである。
- 13 光琳や応挙は、探幽の写生を学んだという点でも、最も基本的な影響を受けた画人として評価される。
- 14 拙稿「絵画」(山口県歴史資料調査報告書第三集『吉川家歴史資料調査報告書第三集』吉川家歴史資料目録)解説所収)

図版掲載所在一覧

- 目次風俗図六曲屏風一雙 堺市立博物館「堺市博物館優品図録」図版19
- 四季松図(狩野探幽筆)六曲屏風一雙 大徳寺『日本屏風絵集成』(四季景物)図版30・31
- 鶴飼図(狩野探幽筆)六曲屏風一雙 大倉文化財団『日本屏風絵集成』(四季景物)図版44・45
- 定家詠月次花鳥図(狩野探幽筆)六曲屏風一雙押絵貼 ミシガン大学図書館『MUSEUM』四一四号、一一頁、図5
- 定家詠月次花鳥図(土佐光起筆)二巻、東京国立博物館『MUSEUM』四一四号、八―九頁、図3
- 定家詠月次花鳥図(尾形光琳筆)六曲屏風一雙押絵貼 静嘉堂『琳派絵画全集』(光琳派 一)第三部作品目録No.42
- 定家詠月次花鳥図縮写本(円山応挙原画)『MUSEUM』四一四号、六頁、図2、
- 十二ヶ月花鳥意図(尾形光琳筆)六曲屏風一雙押絵貼『琳派絵画全集』(光琳派 一)第三部作品目録No.1
- 十二ヶ月花鳥図(酒井抱一筆)十二幅対、御物本他三点『琳派絵画全集』(抱一派)第二部作品目録No.24、25、26
- 十二ヶ月花鳥図(酒井抱一筆)六曲屏風一雙押絵貼『琳派絵画全集』(抱一派)第二部作品目録No.27
- 年中行事図(池大雅筆)六曲屏風一雙『池大雅譜』図版232
- 十二ヶ月花街風俗図(伝蹄斎北馬筆)六曲屏風一雙押絵貼『米国・心遠館コレクション』近世日本絵画集成「原色」図版44
- 十二ヶ月図(田中訥言筆)六曲屏風一雙『日本屏風絵集成』(四季景物)図版104・105